

我々は腸管粘膜下脂肪腫が原因で腸重積を発症し、虚血性腸炎を起こした症例を経験したので報告する。

#### PA-14.

#### 腹膜透析における排液ナトリウム動態からみた腹膜水チャンネルの評価

(腎臓科)

○竹口 文博, 松本 博, 岡田 知也,  
日高 宏実, 吉野 麻紀, 長岡 由女,  
外丸 良, 岩澤 秀明, 中尾 俊之

【目的】腹膜透析における水チャンネルの臨床的評価方法について検討した。

【方法】対象は腹膜透析患者8名。1.36%ダイアニールPD-2液2Lを1時間停滞させ、注液直後排液と1時間後排液のNa濃度差を測定し(1.36%液 $\Delta$ Na), 3.86%液でも同様にNa濃度差を測定した(3.86%液 $\Delta$ Na)。さらに1.36%液での濃度差マイナス3.86%液での濃度差( $d\Delta$ Na)を算出し、各パラメーターとの相関を検討した。

【結果】1.36%液 $\Delta$ Naは $-1 \pm 1$ 。3.86%液 $\Delta$ Naは $-8 \pm 4$ 。 $d\Delta$ Naは $-7 \pm 3$ ( $-12 \sim -2$ )であった。 $d\Delta$ Naと3.86% $\Delta$ Naは有意な相関を認めた( $r = -0.938, p = 0.0006$ )。 $d\Delta$ Naと注液ブドウ糖液あたりの除水率および $d\Delta$ NaとD/P Cr(4時間)には相関を認めなかった。

【結論】 $d\Delta$ Naにより腹膜アクアポリン機能を臨床的に評価しようと考えられた。

#### PA-15.

ネフローゼ症候群に対するシクロスポリンの治療効果は、血清脂質濃度およびリンパ球低密度リポ蛋白受容体発現率によって予測できるか

(八王子・腎臓科)

○齋藤 中哉, 吉田 雅治, 明石 真和,  
伊保谷憲子

【目的】ネフローゼ症候群(NS)に対するシクロスポリン(CsA)の治療効果は、CsAの末梢血リンパ球感受性(IC50)の測定によって予測できることを既に提

唱した。理論的には、CsAは低密度リポ蛋白(LDL)に結合し、その受容体(LDL-R)を介してリンパ球細胞内に取り込まれて治療効果を発現するとされている。また、NSに合併する高脂血症がCsAの治療抵抗性に深く関与している可能性が示唆されている。そこで、NSにおけるCsAのIC50と、血清LDL値、末梢血リンパ球LDL-R発現率、及びその他の脂質、アポタンパクとの関連について検討した。

【対象と方法】腎生検により原発性NSと診断された26例(初発群11例, 既治療群15例)と健常群10例を対象とした。全例において、CsAのIC50と末梢血リンパ球LDL-R発現率を測定した。血清脂質として総コレステロール(TC)、低密度リポ蛋白コレステロール(LDL-C)、中性脂肪(TG)、高密度リポ蛋白コレステロール(HDL-C)、遊離コレステロール(F-CHO)、リン脂質(PL)、血清アポ蛋白としてapoA-I, apoA-II, apoB, apoC-II, apoC-III, apoEを測定した。

【結果】CsAのIC50は、初発群では健常群に比較して有意に高値であった。末梢血リンパ球LDL-R発現率は、3群間で有意差を認めなかった。どの群においても、CsAのIC50と末梢血リンパ球LDL-R発現率との間に相関は認めなかった。初発群においてのみ、CsAのIC50はTG濃度と有意な正の相関を示したが、その他の血清脂質及びアポ蛋白に対しては相関を認めなかった。

【結語】NSにおけるCsAの治療効果を血清LDL値と末梢血リンパ球LDL-R発現率で説明することはできなかったが、初発群においては、高TG血症が治療抵抗性と相関していることが明らかになった。

#### PA-16.

#### 前立腺腫瘍細胞へのMelatoninの作用機序

(解剖学第二)

○古谷 哲男, 小林 正則, 白間 一彦,  
山田 仁三

Melatoninは主として松果体より分泌され、日内変動、免疫機能、性成熟並びに性機能を含む種々生理機能に関与することが知られている。最近、Melatoninには核および膜受容体の二つが存在することが報告されている。今回の報告は、Androgen-依存性前立腺腫瘍細胞株LNCaP細胞を用いて、この細胞より分泌され